

平成 31 年度 入 学 試 験 問 題

国 語

(11 月 17 日)

経営学部 経 営 学 科 (数学・英語のいずれかを選択しても可)
法学部 法 律 学 科 (数学・英語のいずれかを選択しても可)
文学部 人 間 学 科 (数学・英語のいずれかを選択しても可)
教育学部 教 育 学 科 (数学・英語のいずれかを選択しても可)
教育学部 児 童 教 育 学 科 (数学・英語のいずれかを選択しても可)
看護学部 看 護 学 科 (数学・英語のいずれかを選択しても可)

開 始 午前 10 時 30 分

終 了 午前 11 時 40 分

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は 17 ページです。落丁、乱丁、印刷の不鮮明及び解答用紙の汚れなどがあった場合には申し出てください。
3. 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。

① 受験番号欄

受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

② 氏名欄

氏名とフリガナを記入してください。

4. 解答用紙はマーク式と記述式に分かれています。マーク式で

10

 と表示のある問いに対して◎と解答する場合は、次の(例)のように解答番号 10 の解答欄の◎にマークしてください。

(例)

10	☐ a	☐ b	☒ c	☐ d	☐ e
----	-------------------------	-------------------------	------------------------------------	-------------------------	-------------------------

記述式の解答は「国語・記述式」とある解答用紙に記入してください。

5. 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいません。
6. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

□の問題については、著作者より作品の二次使用について、許諾が下りていないため、掲載していません。

二

次の文章を読んで、後の問一～七に答えなさい。

イギリスは、スポーツの近代化の歴史をリードした国といえる。今日のサッカー、ラグビー、テニス、ゴルフなどの近代スポーツを生んだのはイギリスである。そのイギリスは、世界に先駆けて産業革命を成し遂げた国でもあった。

実際、校庭フットボールによってフットボールの近代化が始まった時期は、イギリスの産業革命の幕開けの時代であった。一九世紀半ばにフットボールのルールが明文化され、一九世紀後半にはラグビーとサッカーという競技の輪郭が整っていったというケイ^アイも、イギリスの産業社会の発展と时期的に符合する。フットボールの近代化の過程が体现していた、競技空間と観客の分離や、競技時間や得点に対する意識の変化などは、中世と近代の感覚の違いを体现すると同時に、産業社会^Aの原理とも密接に結びついていた。

アリエスの『子供』の誕生^Bが示唆しているように、中世が大人と子供の区別のない世界だったとすると、近代になると、子供は学校、大人は仕事場というように、生活空間の個別領域化が進んだといえる。

X

なるものが家庭に登場するのも近代になってからである。産業革命は、こうした近代が根底に持つ生活空間の個別領域化に拍車をかけたといえる。

産業革命以前の農業社会や家内制手工業の時代では、生活の場と仕事場はいわば渾然^{こんぜん}一体であった。だが、産業革命によって工場労働という新たな労働形態が出現すると、生活の場としての家庭と、労働の場としての工場とが分離されることになったのだ。

加えて工場では、中世的な職人氣質は一掃された。一人の職人にすべてを任せるのではなく、作業全体をいくつかに分割し、特定の人間が特定の工程を専門に担当することで生産効率を上げようとしたのだ。こうして産業革命は、労働の分業化と専門化を加速した。

これらの傾向は、フットボールの近代化にも通ずる。中世のフットボールは、祝祭と一体化しており、町や村全体が競技会場で、競技空間の内と外を区別や、競技者と観客を区別する発想も希薄だった。だが、近代フットボールは、祝祭からフットボールを切り離し、校庭という専用の競技会場を登場させ、競技空間の内と外を分割するとともに、競技をする人を見る人という立場の違いを明確にしていた。つまり、競技空間の限定や選手と観客の分離は、産業革命によって加速された生活空間の個別化や分業化・専門化という方向性と一致しており、フットボールの近代化の過程は産業社会の原理を見事に反映しているのである。

近代産業社会が志向する諸領域の個別化や分業化・専門化の徹底は、一方では予測可能性の透明化という発想につながっている。一人の職人が一部始終を担当するやり方では、気分次第で生産の速度は左右されやすい。だが分業では、個々の担当箇所が限られているうえ、その人はひたすらその作業に打ち込んで技術を習熟させていくので、仕事上のペースに生ずる誤差を抑制しやすい。つまり、規則的な生産体制がより期待できるのだ。同時に

これは、障害となる要素を生産工程からできるだけ排除しようとする発想だともいえる。

こうした点も、フットボールの近代化の過程に垣間見ることが出来る。中世のフットボールは祝祭と渾然一体化したもので、殴り合いやだまし合いなどのハプニングがつきものであった。つまり、効率よくボールをゴールに運ぶという見地からすれば、予測不能で不規則な展開が排除できないのだ。一方、校庭のフットボールでは、こうした不純な要素は学校教育の大義名分の下に排除され、^C純粋な競技としての秩序を確保しやすい。近代産業社会への移行は、不規則で混沌とした世界からの規則的で純粋な世界、言い換えれば予測可能性の高い世界を志向していたのであり、フットボールの近代化の過程も類似的の傾向を根底に宿っていたのである。

領域を個別に分割し、分業化と専門化を施し、不規則な要素を排除して予測可能性の高い純粋な世界を作るという近代産業社会の基本的な発想は、究極的には Y という目標に向けられている。それは、一定時間内の作業効率を最大に高める能率至上主義である。

つまり、近代産業社会は、基本的には時間との勝負を挑んでいるのだ。そして、こうした発想の登場は、西洋における時間概念の変化を物語っているといえる。

長らく西洋では、時間は神が司るものとされてきた。なぜなら、時は神の被造物たる自然の変化や天体の運行を通じて人類に知らされてきたからだ。人間の側が勝手に時間を決めるなど論外だった。それゆえ、西洋社会では、太陽の南中時がわずか数分であっても異なれば、時差が存在した。つまり、場所ごとに時間がまちまちだったのである。

ところが、イギリスの産業革命は、鉄道という輸送手段の登場をもたらした。鉄道の運行にとって、場所ごとに時間が異なるのは実に煩雑だ。そこで一九世紀半ばになると、便宜的に一定地域の時間を統一して標準時を設定しようとする発想がタイトウ^Dしてくる。これは、伝統的な時間概念を大きく転換することになった。人間の側が勝手に時計という機械に従って時間を決め、時間を管理する時代が産業革命によって開かれたのだ。こうした効率重視の時間概念へのパラダイムシフトこそ、近代産業社会の能率至上主義を可能にしたのである。

時間概念の変化と効率の追求は、フットボールの近代化にも影を落としている。一点先取で終了の中世の祝祭と違って、時計によって試合時間を管理し、時間内にどれだけ多く得点したかという「成果」が勝敗を決めるという競技理念の登場は、近代産業社会の能率至上主義との接点を取り結びながらフットボールの近代化が進んだことを示しているのである。

（鈴木透『スポーツ国家アメリカ』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

問一 傍線部ア、イの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の選択肢から、それぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

アが 10、イが 11。

ア ケイイ |
⑤ ④ ③ ② ①
イドの | シュイを争う | 現状を | ケンイ | ヘイイ |
高い | 地域 | イジ | ある | な | 説明 |

イ タイ | トウ
⑤ ④ ③ ② ①
アク | タイ | 意見 | タイ | タイ | タイ |
をつ | リッ | リッ | レッ | レッ | フウ |
く | する | 組 | を | を | 一 |
		表	表	過
				の
				青
				空

問二 傍線部A「産業社会の原理」とは何か、本文中の言葉を用いて、五十字以内で説明しなさい（句読点も一字と数える）。解答欄は、 Ⅱ。

問三 空欄 X に入る語句として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 12。

- ① 勉強部屋
- ② 子供部屋
- ③ 居間
- ④ 書斎
- ⑤ 寝室

問四

傍線部B「これらの傾向」とは何か、それを説明したものとして最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、13。

- Ⓐ 学校制度の確立と労働環境の独立化。
- Ⓑ 産業革命による生産効率の上昇。
- Ⓒ 中世的な職人氣質の一掃。
- Ⓓ 空間の個別化や役割の分離。
- Ⓔ 分業化や専門化の徹底。

問五

傍線部C「純粹な競技としての秩序」とはどのようなスポーツのあり方を指すものか、それを説明したものとして最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、14。

- Ⓐ 競技は選手と観客がいることで成立し、観客が選手を熱心に応援するような観客と選手が一体化したスポーツのあり方。
- Ⓑ 祝祭のように、様々なハプニングが起こるのも競技の一側面であると認め、それも楽しむようなスポーツのあり方。
- Ⓒ 選手がそれぞれポジションを持ち、その専門性を高め、技術を習熟させていくというスポーツのあり方。
- Ⓓ 予測不能な展開をできるだけ排除し、純粹に誰もが競技を楽しむというスポーツのあり方。
- Ⓔ 競技には選手だけが参加し、決められた競技会場で、選手による得点数を競うというスポーツのあり方。

問六

空欄 Y に入る語句として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、15。

- Ⓐ 金銭の獲得
- Ⓑ 産業革命の推進
- Ⓒ 生産の最大化
- Ⓓ 時間概念の革命
- Ⓔ 近代社会の実現

問七 傍線部D「伝統的な時間概念」とは何か、それを説明したものとして最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしな

さい。解答番号は、16。

- ㉠ 時間とは場所によって異なるものであるという考え方。
- ㉡ 時間とは神が決めるため、場所によって異なつてはならないという考え方。
- ㉢ 時間とは神が定めるものであるという考え方。
- ㉣ 時間とは神が自由気ままに変えてもいいという考え方。
- ㉤ 時間とは人間が神から権限を譲り受けて管理するものだという考え方。

三

次の文章を読んで、後の問一～八に答えなさい。

書紀によると、日本では、推古天皇の三十五年春二月、陸奥^{むつ}で始めて、貉^{むじな}が人に化けた。もつともこれは、一本^{いつぽん}によると、化^い人^{じん}でなくて、比^ひ人^{じん}とあるが、両方ともその後^{のち}に歌^{うた}と書いてあるから、人に化けたにしろ、人に比^{まじ}ったにしろ、人並^{ひとび}みに唄^{うた}を歌^{うた}った事^{こと}だけは事^{こと}実^じらしい。

勿論貉^{むじな}は、神武東征^{じんぶとうせい}の昔^{むかし}から、日本の山野^{やまの}に棲^すんでいた。そうして、それが、紀元^{きげん}千二百八十八年^{せんにひゃくはちじゅうはちとせ}になって、始めて人^{ひと}を化^いかすようになった。——こう云^いうと、一見^{いっけん}はなはだトウトツ^アの観^{かん}があるように思^{おも}われるかも知^しれない。が、それは恐^{おそ}らく、こんな事^{こと}から始^{はじ}まったのであろう。——

その頃^{ころ}、陸奥^{むつ}の汐^{しほ}汲^くみの娘^{むすめ}が、同じ村^{むら}の汐^{しほ}焼^やきの男^{おとこ}と恋^{こひ}をした。が、女^{をんな}には母親^{はは}が一人^{ひとり}ついていて、その目^めを忍^{しの}んで、夜^よな夜^よな逢^あおうと云^いうのだから、二人^{ふたり}とも一通^{いっとう}りな心^{こころ}づかいではない。

男^{おとこ}は毎^{まい}晩^{ばん}、磯^{いそ}山^{さん}を越^こえて、娘^{むすめ}の家^{いえ}の近^きくまで通^とつて来^きる。すると娘^{むすめ}も、コクゲ^インを見^み計^{けい}らつて、そつと家^{いえ}をぬけ出^でて来^きる。が、娘^{むすめ}の方は、母親^{はは}の手前^{てまえ}をかねるので、ややもすると、遅^{おそ}れや^やすい。ある時^{とき}は、月^{つき}の落^おちかか^かる頃^{ころ}になつて、やつと来^きた。ある時^{とき}は、遠^{とほ}近^{ぢか}の一番^{いちばん}鶏^{けい}が啼^なく頃^{ころ}になつても、まだ来^きない。

そんな事^{こと}が、何^{なん}度^どか続^{つづ}いたある夜^よの事^{こと}である。男^{おとこ}は、屏風^{びよぶ}のような岩^{いわ}のかげに蹲^{うずくま}りながら、待^{まち}っている間^{かん}のさびしさをまぎらせるつもりで、高^{たか}らかに唄^{うた}を歌^{うた}った。沸^わき返^{かへ}る浪^{なみ}の音^{おと}に消^きされるなど、いらだたしい思^{おも}いを塩^{しほ}からい喉^{のど}にあつめて、一生^{いっせい}懸^{けん}命^{めい}に歌^{うた}ったのである。

それを聞^きいた母親^{はは}は、傍^{そば}にねている娘^{むすめ}に、あ^あの声^{こゑ}は何^{なん}じやと云^いった。始め^{はじめ}は寝^ねたふりをしていた娘^{むすめ}も、二^に度^ど三^{さん}度^どと問^といかけられると、答^{こた}えない訳^{わけ}には行^いかない。人^{ひと}の声^{こゑ}ではないそう^な。——狼^B狽^うした余^{あま}り、娘^{むすめ}はこ^こう誤^ご魔^ま化^けした。

そこで、人^{ひと}で^{のう}て何^{なん}が歌^{うた}うと、母^{はは}親^{おや}が問^といか^えした。それ^{それ}に、貉^{むじな}かも知^しれぬと答^{こた}えたのは、全^{ぜん}く娘^{むすめ}の機^き転^{てん}である。——恋^{こひ}は昔^{むかし}から、何^{なん}度^どとなく女^{をんな}にこ^こう云^いう機^き転^{てん}を教^{おし}えた。

夜^よが明^あけると、母^{はは}親^{おや}は、この唄^{うた}の声^{こゑ}を聞^きいた話^わを近^きくにいた蓆^{むしろ}織^{おり}りの媼^{おきな}に話^わした。媼^{おきな}もまたこの唄^{うた}の声^{こゑ}を耳^{みみ}にした一人^{ひとり}である。貉^{むじな}が唄^{うた}を歌^{うた}いますか^の——こ^こう云^いいながらも、媼^{おきな}はまたこれ^{これ}を、蘆^{あし}刈^{かり}りの男^{おとこ}に話^わした。

話^わが伝^{つた}わり伝^{つた}わつて、その村^{むら}へ来^きていた、乞^こ食^{じき}坊^{ぼく}主^{しゅ}の耳^{みみ}へはいつた時^{とき}、坊^{ぼく}主^{しゅ}は、貉^{むじな}の唄^{うた}を歌^{うた}う理^り由^ゆを、仔^し細^{さい}らしく説^{せつ}明^{めい}した。——仏^{ぶつ}説^{せつ}に転^{てん}生^{しやう}輪^{りん}廻^{くわい}と云^いう事^{こと}がある。だから貉^{むじな}の魂^{たま}も、も^もとは人^{ひと}間^まの魂^{たま}だつたかも知^しれない。もしそ^そうだとす^すれば、人^{ひと}間^まのする事^{こと}は、貉^{むじな}もする。月^{つき}夜^やに歌^{うた}を唄^{うた}うく^くらいな事^{こと}は、別^{べつ}に不^ふ思^し議^ぎで^{ない}。……

それ以^も来^{らい}、この村^{むら}では、貉^{むじな}の唄^{うた}を聞^きいたと云^いう者^{もの}が、何^{なん}人^{ひと}も出^でるようになつた。そうして、しまいにはその貉^{むじな}を見^みたと云^いう者^{もの}さ^え、現^{あらわ}れて来^きた。こ

れは、鵲^{かもめ}の卵をさがしに行った男が、ある夜岸伝いに帰って来ると、未だ残っている雪の明かりで、磯山の陰に貉が一匹唄を歌いながら、のそのそろついているのを目のあたりに見たと云うのである。

既に、姿さえ見えた。それに次いで、ほとんど一村の老若男女が、ことごとくその声を聞いたのは、寧ろ自然の道理である。貉の唄は時としては、山から聞こえた。時としては、海から聞こえた。そうしてまた更に時としては、その山と海との間に散在する、^(注3) 苦屋の屋根の上からさえ聞こえた。そればかりではない。最後には汐汲みの娘自身さえ、ある夜突然この唄の声に驚かされた。――

娘は、勿論これを、男の唄の声だと思った。寢息を窺^{うかが}うと、母親はよく寝入っているらしい。そこで、そっと床をぬけ出して、入口の戸を細目にあけながら、外の様子を覗^{のぞ}いて見た。が、外はうすい月と浪の音ばかりで、男の姿はどこにもない。娘は暫くあたりを見廻^{まわ}していたが、突然つめたい春の夜風にでも吹かれたように、頬をおさえながら、立ちすくんでしまった。戸の前の砂の上に、点々として貉の足跡のついているのが、その時臙^{おぼろ}げに見えたからであらう。……

この話は、たちまち幾百里の山河を隔てた、京畿^{けいき}の地まで喧伝^{けんでん}された。それから山城^{やましろ}の貉が化ける。近江の貉が化ける。ついには同属の狸までも化け始めて、徳川時代になると、佐渡の団三郎と云う、貉とも狸ともつかない先生が出て、海の向こうにいる越前の国の人をさえ、化かすような事になった。

化かすようになったのではない。化かすと信ぜられるようになったのである――こう諸君は、云うかも知れない。しかし、化かすと云う事と、化かすと信ぜられると云う事との間には、果たしてどれほどの相違があるのであらう。

独り貉ばかりではない。我々にとって、すべてであると云う事は、畢竟^{ひつぎょう}するにただあると信ずる事にすぎないではないか。

我々は、我々の祖先が、貉の人を化かす事を信じた如く、我々の内部に生きるものを信じようではないか。そうして、その信ずるものの命ずるままに我々の生き方を生きようではないか。

^D 貉を輕蔑^{ゆへん}すべからざる所以である。

（芥川龍之介「貉」による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

（注） 1 貉——主にアナグマのこと。地域によっては、他の動物を指すこともある。

2 紀元千二百八十八年——神武天皇が即位してから千二百八十八年。「推古天皇の三十五年」と同じ年を示す。

3 苦屋——菅などの植物で屋根をふいた粗末な家のこと。

問一 傍線部ア、イの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の選択肢から、それぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

アが 17、イが 18。

- | |
|--|
| <p>ア トウトツ</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div style="width: 45%;"> <p>(a) カットウが生じる</p> <p>(b) 彼はユウトウセイだ</p> <p>(c) ごみをトウキする</p> <p>(d) この話はコウトウムケイだ</p> <p>(e) 人々のためにトウホンセイソウする</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>イ コクゲン</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div style="width: 45%;"> <p>(a) このチョウコクは国宝だ</p> <p>(b) 有数のコクソウチャイ</p> <p>(c) 世界のレッコクに肩を並べる</p> <p>(d) コクメイな記憶</p> <p>(e) 新作が誌上でコクヒョウされる</p> </div> </div> </div> </div> |
|--|

問二 語り手が、傍線部A「人並みに唄を歌った事だけは事実らしい」と述べていることについての説明として、最も適切なものを、次の選択肢から

一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、19。

- (a) 貉が歌ったことは事実とし、人に化けたか人に比^{まじ}ったかを明らかにする必要がある。
- (b) 「事実らしい」と述べているように、事実だとは思^うがはっきりしないことなので、伝聞の形で書いている。
- (c) 複数の書物に貉が歌ったと書かれているので、紛れもない事実である。
- (d) 事実でないと考えてはいるが、複数の書物に貉が歌ったと書かれているので、事実として話を進めることにする。
- (e) 貉が歌ったとしても「人並みに」歌えるわけがないので、皮肉交じりに述べている。

問三 傍線部B「狼狽^{ろうばい}」の意味として適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、20。

- Ⓐ うろたえること。
- Ⓑ 恥ずかしがること。
- Ⓒ 恐がること。
- Ⓓ 知らないふりをする事。
- Ⓔ 悲しむこと。

問四 この文章には「―(ダッシュ)―」が多用されているが、その使い方の説明として最も適切でないものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、21。

- Ⓐ 時間の経過による状況の変化をよりはっきりさせるために使っている。
- Ⓑ 語り手の想像としての事実に対する、語り手の評価を述べるために使っている。
- Ⓒ 語り手の想像としての事実の始めと終わりを示すために使っている。
- Ⓓ 一般的に考えられていることに対して反対意見を述べるために使っている。
- Ⓔ 語り手の想像としての事実に対する、語り手のコメントや見解を強調するために使っている。

問五 傍線部C「ほとんど一村の老若男女が、ことごとくその声を聞いたのは、寧ろ自然の道理である」の説明として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、22。

- Ⓐ 同じ村の中なら当然貉の声は届くのであり、ほとんどの人の耳に同時に入るから。
- Ⓑ 貉が歌いながら歩いている姿を見た者があるなら、声を聞く頻度は当然高くなるから。
- Ⓒ 貉が歌いながら歩いている姿を見たという者があるなら、実際に聞いていなくても声を聞いたと人に言うことに対する抵抗感は少なくなるから。
- Ⓓ 貉の声は、貉が歌いながら歩いている姿と一体のものだから。
- Ⓔ その頃になると貉の数も相当多くなっていたから。

問六

文章が述べている、貉が唄を歌ったり人に化けたりすることになったいきさつを次の枠内のように表すとき、
序となっているものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、23。

- ・ Aが何気なくついた嘘^{うそ}が、家族や隣人に伝わる。
- (1) 事実でない情報が、事実として広まる。
- (2) Aさえも事実であると思うようになる。
- (3) 最初に流された嘘に尾ひれが付いて広まる。
- (4) 理屈好きな者が、事実でない情報を正当化する。
- ・ 国中の至る所で、様々なパターンで、事実として話されるようになる。

- ① (1) ↓ (2) ↓ (4) ↓ (3)
 ② (2) ↓ (3) ↓ (1) ↓ (4)
 ③ (3) ↓ (1) ↓ (4) ↓ (2)
 ④ (4) ↓ (1) ↓ (3) ↓ (2)
 ⑤ (1) ↓ (4) ↓ (3) ↓ (2)

問七 次の枠で囲んだ一段落を挿入するとすれば、文章中のV～Zのどこに入れたらよいか。次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。

い。解答番号は、24。

(注)

イエエツは、「ケルトの薄明かり」の中で、ジル湖上の子供たちが、青と白との衣を着たプロテスタント派の少女を、昔ながらの聖母マリアダと信じて、疑わなかった話を書いている。ひとしく人の心の中に生きていくと云う事から云えば、湖上の聖母は、山沢の貉と何の異なる所もない。

注 イエエツ——ウィリアム・バトラー・イエエツ。一九二〇世紀のアイルランドの詩人、劇作家。

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| Ⓔ | Ⓓ | Ⓒ | Ⓑ | Ⓐ |
| Z | Y | X | W | V |

問八 傍線部D「貉を軽蔑すべからざる所以である」の意味することを、次の文に続けて三十字以内（読点も含む）で説明しなさい。解答番号は、

Ⅲ。

貉のそうした行動を軽蔑することは、。

